

システム共同運用記念シンポジウム： 早慶図書館の挑戦 -その舞台裏-

せきぐち もとこ
関口 素子

(メディアセンター本部課長)

1 はじめに

2020年2月25日(火)、早稲田大学図書館(以下「早稲田」とする)および慶應義塾大学メディアセンター(以下「慶應」とする)が主催する「システム共同運用記念シンポジウム：早慶図書館の挑戦～コンソーシアムによる日本初のシステム共同運用～」を開催する日の朝、早稲田の会議室にマスクを着け緊張した面持ちの関係者が集合した。新型コロナウイルス感染症への東京都での感染者が、前日までの累計で32名を数えるときだった。

Ex Libris社が提供する図書館システムAlmaは、世界では導入例が多いが日本での採用は初めて、またコンソーシアムによる大学図書館間での共同運用も国内初であり、この早慶の動きに対する図書館界での注目度は高く、システム選定から導入そして運用開始、さらに半年を経たところで、それまでの経験を広く共有する機会を設けることは必然であった。筆者は2018年秋に慶應の本部総務担当に着任したことで、システムの中身には詳しくないままに、シンポジウムの準備から当日運営までの慶應側の指揮役を担うこととなった。

2 順調に進む準備(2月初旬まで)

2019年7月16日、早稲田大学図書館深澤館長と本木事務部長、慶應義塾大学メディアセンター須田所長と松本事務長を交えて開催した早慶懇談会において、シンポジウムの日時、場所、テーマ、プログラム案、夕刻から情報交換会も行うことについて双方が合意し、準備がスタートした。午前中のプログラムは、海外ユーザのコンソーシアム先行事例発表として図書館員のスピーチをメインに、Ex Libris社からのプレゼンテーションも入れて講演スタイルで、そして午後は各論として、早慶から各業務チームのリーダーがリレー形式で報告するスタイルとすることでまとまった。海外事例のスピーカーの人選と招待はEx Libris社に依頼することとした。

会場は、早稲田の図書館が入る早稲田大学総合学術情報センターにある国際会議場井深大記念ホールを提供していただくことになり、400名を収容する立派な会場にふさわしいシンポジウムにしなければならない使命を感じた。

これを皮切りに、早慶の総務担当は4回の対面打合せやBOXでのファイル共有等で準備を進めた。

(1) 広報

約4か月前から広報を開始することとして、2000枚のちらしを作成し、図書館総合展(2019年11月12-14日 パシフィコ横浜)、三田図書館・情報学会(11月16日)、私立大学図書館協会東地区部会研修会(11月28-29日 本学日吉キャンパス)、同協会同部会研究分科会報告大会(12月19日 早稲田大学)での配布、また本学文学部図書館・情報学専攻、出入りの書店、出版社や知人への配付などを行った。ちらしのデザインは早稲田のスタッフの手になるスタイリッシュな仕上がりで、その図柄はシンポジウムのイメージシンボルとしても用いられた。

11月11日に早慶両図書館のWebサイトでの広報とGoogleフォームによる申込受付を開始した。締め切りは1月31日。定員はシンポジウム400名、情報交換会100名で、申込状況は早稲田に集約した。400名も集まるのか…と不安を抱いていたが、開催予告が国公私立大学図書館協力委員会のメーリングリストに流れ、また国立国会図書館の「カレントアウェアネス」¹⁾に掲載されたことが追い風となった。

(2) 海外からのゲストスピーカー

10月下旬には、米国モンタナ州立大学図書館長Kenning Arlitsch氏が、自ら牽引するモンタナ州内のAlmaユーザを含む大学図書館コンソーシアムについて事例報告をしてくださることが決定した。また12月末には、Ex Libris社からのプレゼンターとして、APAC(アジアパシフィック地域) Director

of Solution ArchitectureのNir Sherwinter氏のオーストラリアからの来日が決まった。

(3) 併設展示

12月初旬に早稲田から、シンポジウムに合わせて会場2階の展示室で併設展示を行い、早慶の長きにわたる関係を示す資料を来場者にご覧いただいております。というこの機会にふさわしい提案があり、早稲田の特別資料室担当と慶應のスペシャルコレクション担当が協力し、急ピッチで準備にあたった。

慶應からの展示物は、メディアセンターが所蔵しかつ担当者がタクシーで持ち運べるものに限られたため、多くを早稲田の所蔵資料に負うことになったが、全38点を集め解説目録を作成し、シンポジウム当日から3月3日までの開催にこぎつけた。早慶の学祖同士、また初めて光をあてることになった初代図書館長同士の繋がりを物語る書簡なども展示され、両校の図書館スタッフにとっても大変興味深く、シンポジウム来場者の多くが足を運んでくれた。



展示会場

(4) 企業からの協賛

システム共同運用に深くかかわる企業から協賛を得て、協賛金はちらし印刷、記念品作成、当日参加者の飲み物調達に使わせていただいた。また当日は会場の受付ホールにブース出展のスペースを設けて、それらの企業と来場者との交流の場とした。

(5) 裏方として支える

a 記念品

深澤館長の発案で、記念品として配布資料を入れるクリアファイルを作ることになり、デザインは早稲田が、業者窓口は慶應が担当し1000枚を作製した。早慶それぞれのモットーがラテン語で刻まれた建物の写真とイメージカラーを織り込んだ印象的なデザ

インになった。表面に書かれたSeptember 2, 2019は、新システムが稼働した記念すべき日付である。



記念品 クリアファイル

結局、配付資料は極力電子的に提供するという当初の目論見が外れてどっさりと袋に入れることとなり、クリアファイルに資料をはさむという作成意図は生かせなかったが、未使用で美しいまま記念品として参加者に差し上げることができた。

このデザインしかり、各業務チームからの報告用に作成したパワーポイントのオリジナルテンプレートもしかり、早慶vs慶早、どちらの名前を先に出すかという小さそうで実は気になる問題では、双方とも気を遣い常に譲り合ったのは良い思い出である。

b 情報交換会

当日の18時からシンポジウム会場3階の会議室において情報交換会を開催するために、早稲田がケーターリング業者を選定、価格交渉を行った。大役を終えた登壇者にも全員出席してもらい、一般参加者との交流や意見交換の場となることが期待された。

c 配布資料

ゲストスピーカーの講演日本語要旨のほか、共同運用の全体像を理解する手助けなるシステム構成図、用語解説、早慶図書館ファクトシートと構成図、さらにプログラム、質問票、アンケート用紙、無線LAN接続案内、ランチマップなどを各400枚用意し、その袋詰めは早稲田が人海戦術で行った。開催直前にEx Libris社から追加で大部な講演スライドの印刷物が届き、急遽当日受付にて別途お渡しすることにした。それ以外のノベルティグッズと飲料は、会場入口で各自が自由に取る形をとった。

d 要員

当日の運営に必要な業務と人数を洗い出し、早慶

双方から要員を出すことにした。進行管理、来賓応接、受付・展示・ブース管理、場内誘導・撮影、ステージ管理、質疑応答対応の6グループに分け、37名で分担した。何かと会場校に負担をかけることが多く、要員への指揮やマニュアル作成、協賛企業のブース出展対応もすべて早稲田にお任せした。緻密に組まれたグループごとのタイムスケジュールと要員の協力のお陰で、当日はスムーズに進行した。

受付では、ほぼ30分間に集中する400名の来場者を滞留させず速やかにさばくため、早慶からの参加者に対する事前受付や情報交換会参加費の前日集金などの工夫をこらした。また来賓、一般、早稲田、慶應ごとに色違いのネックストラップを用意し、各自が名刺を入れることで相互の認識を容易にした。このあたりのアイデアの多くは、イベント企画力の高い早稲田発によるものであった。

e 記録

シンポジウムの模様を記録に残すため、会場備え付けの機材で動画の固定撮影が可能なことをあらかじめ確認し、写真は早慶からカメラ要員を出して共有することとした。公開の可否は登壇者に確認した上で決定し、会場の参加者には写り込みについて当日のアナウンスで了解を得ることにした。

3 新型コロナウイルス感染症

開催まであと1か月を切り、本番のイメージが固まり始め、また順調な申込みで情報交換会は満席という嬉しい状況に定員オーバー後の対応を考え始めた頃、横浜のクルーズ船内での新型コロナウイルス感染症のニュースが日増しに大きく取り上げられるようになってきた。そして、国内での感染の広まりという事態が社会活動にもじわじわと影響を及ぼし始めた2月中旬になると、我々の専らの関心事は、海外からの講演者が来日できるのか、人が集まり飲食を共にする情報交換会はまずいのではないかと、そもそもシンポジウムは開催できるのか、に変化し、早慶総務同士のメールも「新型コロナウイルスへの対応」という件名が大量に飛び交うようになった。

悩みながらも早慶で協議の結果、本番一週間前に情報交換会の中止を決定し、即日申込者全員に対してメールで通知。ケータリング料理はキャンセル料発生の前日に止めることができた。今から思えば飲食ありの情報交換会はやめて当然だが、三密という

言葉が登場したのはその1か月以上あとであったことを考えると、その時点では賢明な判断であった。

次に、アメリカのKenning氏とオーストラリアのSherwinter氏が東京に来ることに不安を抱き、来日を見合わせる事態となった場合、代替手段としてWeb中継やビデオ参加が可能なのか、さらに国内参加者でも来場を控える人が出る恐れがあり、ライブ配信は出来るのか、について急ぎ調査し準備に動いた。幸いにも講演者のお二人からは、東京の状況を案じつつも訪日の予定は変えないとの連絡があり、それが実地開催に向けて我々の背中を強く押ししてくれたことは言うまでもない。

4 「開催前日」とシンポジウム当日

シンポジウム開催日は週末と振替休日の3連休明けの火曜日であり、実質的な「開催前日」は前週の金曜日であった。案の定、感染へのリスク回避のため残念ながら来場を見合わせる人が続出したが、リアルタイム配信により参加する方法を「開催前日」に申込者全員に案内することができた。配信手段にはWebexを用いて、見逃した場合には後日早稲田のYouTubeアカウントで限定的に収録動画を視聴できる環境も整えた。

会場校である早稲田大学の本部から行事運営の指針が出され、懇親会の中止、消毒液設置とマスク着用が明言されたのもこの日であり、週末を挟み当日までに状況が悪化しないことを祈るのみであった。

そして本番の朝、考えられる感染予防対策をとり、全員の力を結集してこの日を迎えたからには、今日のシンポジウムが成功裏に終わることを微塵も疑わなかったが、この感染症の潜伏期間といわれる2週間先まで何も起きないことを見届けずして本当の成功はないことだけが不安であった。しかし、一人で考えても解決しない不安はひとまず封印して、進行統括者のてきばきとした指示のもと配置につく要員たちの後を追って会場に向かい、受付や周囲の様子を確認し、自らの役割である司会の立ち位置などの最終打合せを早稲田の司会者と共に行った。

9時を過ぎて続々と受付を通る来場者は、ホール内でおのずと密を避け分散して着席していった。ゲストスピーカーのお二人も無事に到着され、応接室で早慶の館長、所長と和やかに歓談されていた。



会場全景

9時半の開会時刻を迎え、午前の部がスタート。仮想的な早慶共同図書館の概念や期待される効果に言及された深澤館長の開会挨拶に引き続き、Ex Libris社Sherwinter氏から、早慶が導入したAlmaとPrimoVEを含めて同社の製品概要の紹介があった。次に、Alma導入事例報告として、モンタナ州立大学図書館長Arlitsch氏により、同氏が代表の一人を務めるモンタナ州の大学図書館コンソーシアムTRAILS²⁾の活動や課題と将来について講演が行われた。英語でのプレゼンテーションは通訳なしの予定であったが、当日ProQuest社が質疑応答の翻訳などを引き受けてくださり大いに助けられた。



Ex Libris社 Nir Sherwinter氏



モンタナ州立大学図書館長 Kenning Arlitsch氏

午後の部は、全体、システム、目録、受入・雑誌、電子、閲覧、ディスクバリーの各業務チームから早慶1名ずつの担当者が登壇し、早慶版Alma, PrimoVE稼働に至るまでとそれから半年の山あり谷ありを、今後の展望も交えて生の声で報告した。その内容は、本特集の各担当者による記事を参照していただきたい。

5 むすびに代えて

とにかく感染者が出ないことを願い続けた2週間が過ぎ、ゲストスピーカーが元気に帰国されたことを確認し、ようやくシンポジウムが「無事に」終わった。参加者は356名（早慶教職員109名、一般その他166名、Web視聴81名）を数え、新型コロナウイルスの影響下でも申込者のおよそ8割5分が関心を寄せ続けて参加してくださったこと、アンケートでは叱咤激励とともに概ね満足の声をいただいたことは何よりもありがたかった。収録した動画は、申込者に早稲田のYouTubeのURLを案内して限定的に約2週間公開した。

もし情報交換ができたならば、それをきっかけにAlmaユーザが増え、将来的にEx Libris社へ日本からの要望をより強く伝えられたかも知れない、などと想像すると悔やまれるが、開催日をもう数日遅く設定していればWeb配信以外の道はなかったことを思えば、早稲田のあのホールで臨場感あふれるシンポジウムができたことは奇跡でもあった。

会場を提供していただいた早稲田の皆様には多くのご苦勞をお掛けしたが、それを厭わずに運営にあたってくださったことに心より感謝したい。また、登壇者、参加者、運営要員、協賛企業の方々にもこの場を借りて御礼を申し上げる。

参考文献

- 1) 国立国会図書館. “【イベント】システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」(2/25・東京)”. カレントアウェアネス・ポータル.
<https://current.ndl.go.jp/node/39502>.
(参照 2020-04-14).
- 2) TRAILS. Treasure State Academic Information & Library Services. TRAILS Montana.
<https://trailsmt.org/>, (accessed 2020-07-20).